近世薩摩焼の窯構造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1616

近世薩摩焼の窯構造

渡 辺　芳 郎

はじめに

近世薩摩焼は，豊臣秀吉の朝鮮出兵(1592-98)の際に，島津義弘らによって連れてこられた朝鮮陶工にその端を発する。その後，肥前や京都，瀬戸などの技法・意匠を積極的に導入し，多種多様な製品を生産した。それゆえ本稿では，「近世薩摩焼」をその製品の内容ではなく，「近世において，島津領内(薩摩・大隅両国ならびに日向国の一部，現在の鹿児島県全域と宮崎県旧諸県郡)で生産された陶磁器」と定義する。またここでいう「近世」とは，秀吉の朝鮮出兵から明治4年(1871)の廃藩置県までとする。

その薩摩焼を焼成した窯の構造については，『薩摩焼の研究』(田沢・小山1941，以下『研究』と略称)において，「朝鮮系半円筒形単室傾斜窯」と「肥前系連房式登窯」の二者に分類されて以来(pp.255-259)，それが現在まで踏襲されている。しかし近年，近世薩摩焼窯跡の発掘調査が進展し，新たな知見が増加している。

本稿は，それら考古学的調査の成果に基づきながら，窯構造の分類ならびに時代的変遷のアウトラインの把握を試みるものである。ただし窯跡の考古学的調査には，地域的・時期的な偏りもあり，全貌を把握するには資料的にいまだ不十分な点もあることは否めない。それゆえ本稿では一部予想も含まれていることをあらかじめ断っておきたい。

1　窯跡の事例

本稿で扱う窯跡資料は，表1にまとめた合計13例である。各窯跡の構造については次章で改めて詳述するので，ここでは資料の性格とその取り扱いについて触れておきたい。

13例中9例は，いずれも考古学的な発掘調査を経て，窯構造がほぼ判明している資料である(表1　No. 1～9)。これらが本稿における検討の中心となる[1]。

また窯跡の場合，発掘されていなくても，残存状況次第では表面観察からその構造が推定できる資料がある。それが表1のNo.10～13に挙げた4例である。これらの資料は，上記の9資料に比べれば，情報の精度としてやや落ちることは否めない。しかし単室登窯か連房式登窯かの判別はある程度可能なので，適宜，資料として利用したい。

ところで『研究』では，窯体未確認であっても，採集された窯道具などを手がかりとして，報告している窯跡をすべて「朝鮮系半円筒形単室傾斜窯」と「肥前系連房式登窯」とに分類している(p.257)。しかし後述するように，このような判別方法では，「堂平新窯」のように，その存在があやふやな窯も含んでしまう危険性があるので，本稿では採用せず，表1の資料に限って議論を進めたい。

このほか近世後半に作成された『三国名勝図会』などの各種絵図には，窯場を描いたものが散見される。本稿ではそれらの資料も窯構造理解の一助として用いたい。

2　窯構造の分類

現在知られている近世薩摩焼の窯構造は，(1)宇都窯Ⅰ期，(2)単室登窯，(3)連房式登窯の3種類に分類でき，連房式登窯は，その平面形態から(3-1)直壁形連房式登窯と(3-2)扇形連房式登窯の2種類に細分できる[2]。

先述したように『研究』では，本稿で言う(2)を「朝鮮

表1　発掘調査等で窯構造の判明している窯跡

No	窯跡	系統	所在地	窯構造 (直・扇：平面形)	焼成室数 (燃焼室を除く)	主要製品
1	宇都窯	竪野	姶良町鍋倉	Ⅰ期：名称未定 Ⅱ期：単室登窯		陶器
2	竪野冷水窯	竪野	鹿児島市冷水町	連房式登窯(直)	7室	陶器(磁器?)
3	串木野窯	苗代川	串木野市下名	単室登窯		陶器
4	堂平窯	苗代川	東市来町美山	単室登窯		陶器
5	山元窯	龍門司	加治木町反土	連房式登窯(直)	7室	陶器(磁器)
6	弥勒窯	龍門司	加治木町木田	連房式登窯(扇)	4室＋α	磁器(陶器)
7	脇本窯	平佐？	阿久根市脇本	連房式登窯(扇)	4室	磁器
8	平佐新窯	平佐	川内市天辰	連房式登窯(扇)	4室	磁器
9	平佐大窯	平佐	川内市天辰	連房式登窯(扇)	12室	磁器
10	龍門司古窯	龍門司	加治木町小山田	連房式登窯(直)	8室(11室？)	陶器
11	五本松窯	苗代川	東市来町美山	単室登窯		陶器
12	南京皿山窯	苗代川	東市来町美山	連房式登窯		磁器
13	平佐北郷窯	平佐	川内市天辰	連房式登窯(扇)	3室	磁器

系半円筒形単室傾斜窯」，(3)を「肥前系連房式登窯」としているが，ここでは「○○系」といった名称は用いず，あくまで窯構造の特徴そのものから命名しておきたい。その理由は，「○○系」という技術系譜の問題は，窯構造だけでなく，窯道具などを含めた焼成技術全体の中で理解するべきものであること，それゆえ他系統技術の存在も想定しておく必要があること，またたとえ技術系譜が一地方に求められたとしても，鹿児島に伝わったのちに在地的な変容が生じている可能性もあること，などが考えられるからである。それゆえ窯構造のみを取り上げて検討する本稿で，「○○系」と呼ぶことは，時期尚早であると考えている。

以下，具体的な事例を挙げながら，各構造について述べていく。なお各窯跡の年代については，第4章で検討する。

(1) 宇都窯Ⅰ期

姶良町鍋倉に所在する宇都窯は，竪野系窯場の始祖・金海が，最初に開いた窯と考えられており，1934年，田沢金吾・小山富士夫氏らの発掘調査により，単室登窯が検出された（『研究』pp.15-34)。ところが，2000年の姶良町教育委員会の再発掘によって，単室登窯の直下から別の形態の窯が検出され，宇都窯にはⅠ期・Ⅱ期の二時期の窯構造があることが判明した(姶良町教育委員会2002)。1934年検出の単室登窯はⅡ期にあたる(図1－①)。

宇都窯Ⅰ期は，Ⅱ期の窯によって一部削平されており，また調査範囲が限定されているため，その全体形は把握できていない。しかし，畦状の四本の排煙孔が確認されており，これまで知られていた近世薩摩焼の窯構造とは大きく異なっていることが明らかになっている。ただしⅠ期とⅡ期とはわずかに主軸を異にするだけであり，またⅠ期の排煙孔を瓦片などで埋めてⅡ期の床面が構築されていることから，両者は偶然同一個所に作られた窯ではなく，ともに「宇都窯」として理解した方がよかろう。

この窯構造は，現段階では鹿児島県内において類例が知られておらず，その技術系譜が，朝鮮半島に求められるのか，あるいは国内，または中世以来の土師器・瓦窯などに求められるのか，判然としない。また前述したように全体形が明らかになっていないので，今のところ，窯構造の名称を確定せず，単に「宇都窯Ⅰ期」とのみ呼んでおきたい。

(2) 単室登窯

単室登窯とは，外形はカマボコ状を呈し，燃焼室から窯尻まで長いトンネル状の一室の焼成室よりなる登窯である。

近世薩摩焼における単室登窯としては，姶良町鍋倉の宇都窯Ⅱ期，串木野市下名の串木野窯，東市来町美山(以下，近世の地名である「苗代川」と呼ぶ)の堂平窯が発掘調査されており，また苗代川の五本松窯も表面観察から単室登窯と推定される。

宇都窯Ⅱ期(図1－①)は，2000年の再調査の結果によれば，全長約6.7m，焼成室長4.9m，幅0.8～0.9mとされ，傾斜角度は約20度を測る。また側壁には改修の痕跡が認められる(姶良町教育委員会2002)。

串木野窯(図1－②)もまた，1934年，田沢・小山氏らによって調査され，窯尻部が確認されていないものの，幅約1.2m，全長14.5m以上と推測される単室登窯が検出されている。傾斜角度は13.5度を測る(『研究』pp.150-161)。

堂平窯は，1998年，鹿児島県立埋蔵文化財センターによって発掘調査され，全長30.5m，幅1.2mの単室登窯が検出された。傾斜角度は約17度である。調査者によれば，床面において5回の作り替えが観察できるという。なお付言すれば，『研究』において，堂平窯廃棄後に連房式登窯の「堂平新窯」が築造されたとされ(p.176)，その後もそれを踏襲する記述が多いが，1998年の調査では，堂平窯跡周辺から連房式登窯は発見されていない(池畑1999)。

ところで宇都窯Ⅱ期の規模は，串木野窯・堂平窯に比べると，きわめて小型である。その理由は，技術的なものというより，宇都窯が島津義弘の命により茶道具中心の生産であったのに対し，串木野窯・堂平窯が，日用品生産を中心とした産業的な窯であるという，窯の性格の違いに由来すると想像される。

発掘事例は以上3例であるが，そのほか五本松窯も単室登窯と考えられ，表面測量によると，全長約30m，幅1mを測る(四元編著1988　p.461-463)。

(3) 連房式登窯

連房式登窯とは，複数の焼成室が通焔孔でつながる登窯をいう。17世紀に肥前地方で成立し，以後，陶磁器焼成の窯として日本各地で採用された。

近世鹿児島における連房式登窯は，各焼成室の幅が最下室から最上室までほぼ同一である「直壁形連房式登窯」と，焼成室の幅が上へ行くほど広くなり，平面形が扇状を呈する「扇形連房式登窯」に細分できる。

1) 直壁形連房式登窯

直壁形連房式登窯の発掘事例としては，鹿児島市冷水町に所在する竪野冷水窯，加治木町反土の山元窯がある。また同町小山田の龍門司古窯もこのタイプに含まれる。

竪野冷水窯(図1－③)は，1976年に発掘調査され，胴木間（燃焼室）＋7室よりなる，全長14.48m，幅約1.95mの連房式登窯が検出されている。各焼成室の規模は大きな差はないが，最上室のみ，やや大型のようである(戸崎他編1978)。

山元窯(図1－④)は，1993年，加治木町教育委員会によって発掘調査された。窯体の残存状況はけっして良好とは言えないが，報告者は，胴木間＋7室，全長約14m，幅約2mの直壁形連房式登窯を復元している(関編1995)。

龍門司古窯(図1－⑤)は，現在でも上部構造が残る窯跡で，1953年まで操業されていたという。1967年に寺尾作次郎氏によって概略の測量結果が報告されており，全長約22.7m，各焼成室の内壁幅2.87mであることがわか

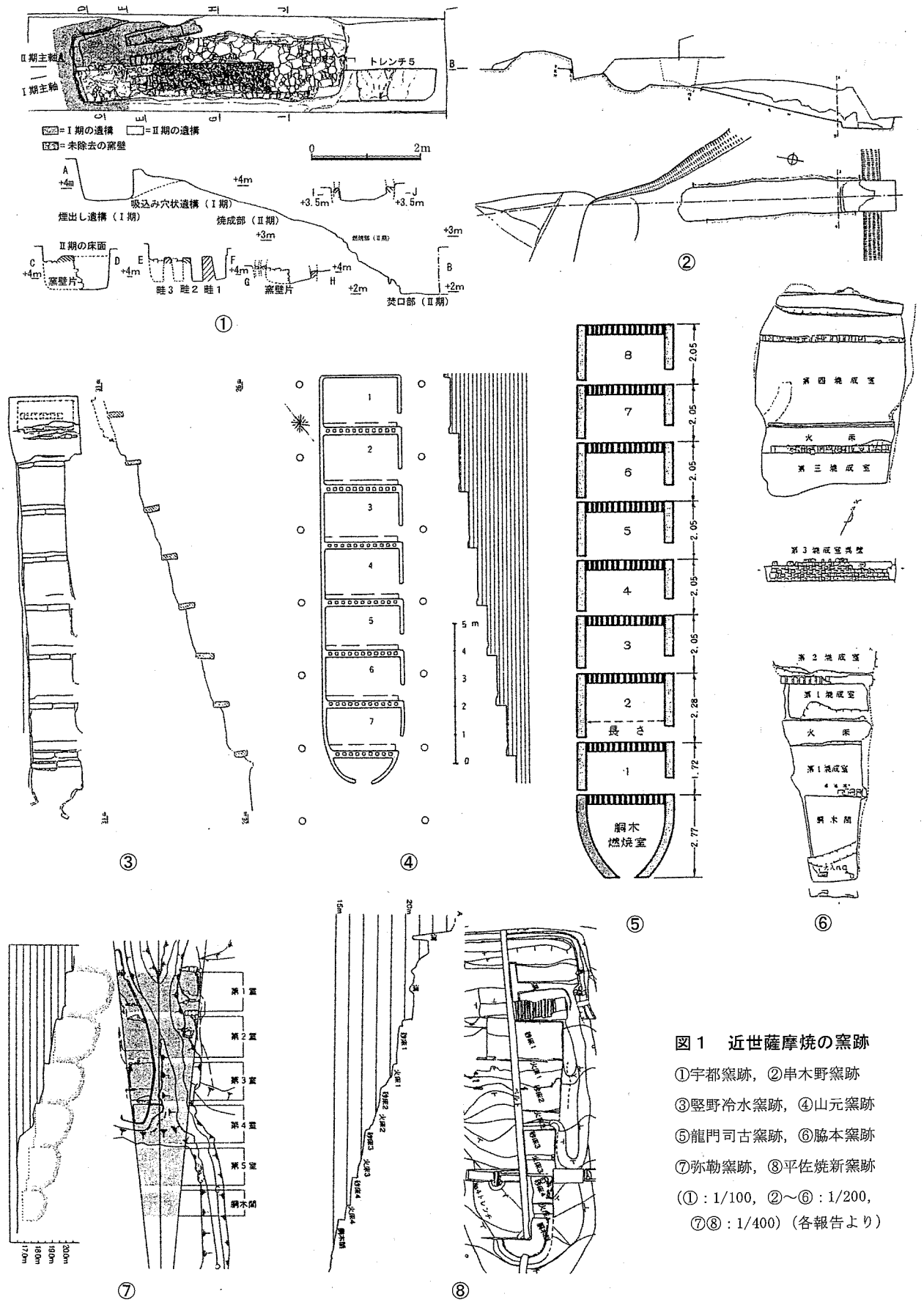

図1　近世薩摩焼の窯跡

①宇都窯跡，②串木野窯跡
③堅野冷水窯跡，④山元窯跡
⑤龍門司古窯跡，⑥脇本窯跡
⑦弥勒窯跡，⑧平佐焼新窯跡
（①：1/100，②～⑥：1/200，
⑦⑧：1/400）（各報告より）

る。なお胴木間＋8室が現存するが，もとは11室以上あったとされる(寺尾1967)。

2) 扇形連房式登窯

発掘調査された扇形連房式登窯としては，阿久根市脇本の脇本窯跡，加治木町木田の弥勒窯跡，川内市天辰平佐焼窯跡群の大窯跡・新窯跡がある。

脇本窯跡(図1－⑥)は，1972年，池水寛治氏らによって発掘調査された。窯体中央部を道路によって破壊されているが，胴木間＋4室，全長約20 mの窯が確認されている。最上部第4室の幅は推定4.70 mを測る(池水1978)[3]。

弥勒窯跡(図1－⑦)は1997年に加治木町教育委員会によって発掘調査された。残存状況はさほど良くなく，また胴木間も未検出であるが，報告者は，遺構と周辺地形から，胴木間＋4室以上の扇形連房式登窯を復元している(関編2001)。

平佐新窯跡(図1－⑧)は，1999年に川内市教育委員会によって発掘調査され，胴木間＋4室の連房式登窯が検出された。発掘調査は，保存を前提としているため窯体北側の半分のみであったが，全長は約19 m，また窯尻付近の最大幅は約5.5 mを測る(前・小原2000)。また平佐大窯跡は，筆者らによる1999年からの分布・測量調査，2003～04年の発掘調査によって，胴木間＋12室よりなり，全長が46.28～46.32 m，11号室の内壁幅が7.38 mをはかることが確認されている。ただし最奥部の12号室の内壁幅は7.02 mで，11号室に比べやや狭い。なおこの規模は，近世鹿児島では現在のところ最大である(渡辺2000b・2004)。また平佐焼最古の窯と考えられている北郷窯は，未発掘であるが，表面測量から全長約13～14 mの胴木間＋3室の扇形連房式登窯であると推定される（渡辺2000b)。

このほか苗代川の南京皿山窯は未発掘のため直壁形か扇形かは判別できないが，段々状の遺構が表面から確認できることから，連房式登窯と推測される。

3　窯構造と製品との関係

さて前章で分類した各窯構造は，その主要な製品において違いが見られる。それを整理したものが表2である。宇都窯Ⅰ期・単室登窯・直壁形連房式登窯はいずれも陶器をその主たる生産品としているのに対し，扇形連房式登窯は磁器窯である。つまり近世鹿児島において窯構造はまず主要製品の差異と結びついていることを指摘しておきたい[4]。

ただし山元窯においては，陶器生産が主体ではあるが，磁器焼成も試みられていたことが確認されており（関編1995)，逆に弥勒窯では，陶器も焼成されていたようである（関編2001)。また堅野冷水窯においても磁器が焼かれた可能性が考えられている（『研究』pp.109-112)。しかし出土資料を見る限り，いずれの窯においても，陶器と磁器が同等の生産ベースで生産されていたとは考えにくく，あくまで山元窯と堅野冷水窯は陶器，弥勒窯は磁器が主体であったことは間違いなかろう。

なお窯構造と製品内容との関係については，第6章で改めて触れたい。

4　各窯構造の出現・存続時期

(1) 宇都窯Ⅰ期

Ⅰ期・Ⅱ期を含めて，宇都窯の操業年代を記した同時代史料はないが，島津義弘が帖佐館に居住した期間(文禄4年(1595)～慶長11年(1606))と一部重なると考えられる。『研究』では朝鮮陶工の渡来を『先年朝鮮より被召渡留帳』(深港2000参照，以下『留帳』と略称)に基づいて慶長3年とした上で，当時の島津義弘の動向(関ヶ原の戦いとその戦後処理)を加味して，慶長5～6年(1600～01)頃の開窯としている(pp.16-17)。一方，慶長9年(1604)の『旧記雑録』によれば，その頃すでに薩摩では茶入を焼く窯があったようであり，また同10年(1605)の博多の商人・神屋宗湛の日記には「肩衝　サツマヤキ」という記述が見られる(鹿児島県維新史料編さん所編1983　p.945　文書No.1966，永島校注1984　p.177，松村2001a.b)。

以上のように慶長年間に宇都窯が操業されていた可能性はあるが，上限がどこまでさかのぼるかは確定しがたく，ここでは宇都窯Ⅰ期の年代は16世紀末から17世紀初頭とのみとりあえず考えておきたい。

(2) 単室登窯

宇都窯Ⅱ期は，層位関係からⅠ期ののちに位置づけられることは間違いない。下限を義弘の平松城転居(慶長11年)に求めるか，加治木館居住(同13年)に求めるかは判断できないが，Ⅰ期と同様，おおまか16世紀末～17世紀初頭の年代を与えておきたい。

串木野窯は『留帳』の記載によれば，慶長3年(1598)に渡来した朝鮮陶工たちが，同8年に苗代川に移住するまでの間，操業されていた窯であり，開窯は16世紀末と考えられる。

堂平窯は，現在，報告書作成中であり，最終的な年代推定はその刊行を待ちたいが，堂平窯跡から出土している

表2　窯構造と製品の関係

窯構造		主要製品	具体例
宇都窯Ⅰ期		陶器	宇都窯Ⅰ期
単室登窯		陶器	宇都窯Ⅱ期・串木野窯・堂平窯(・五本松窯)
連房式	直壁形	陶器	山元窯・龍門司古窯・堅野冷水窯
登窯	扇形	磁器	脇本窯・弥勒窯・平佐新窯・平佐大窯（・平佐北郷窯)

摺鉢は，筆者が仮称２型式としたものと類似し，その年代は17 世紀第３四半期前後と考えている（渡辺 2000a)。上限・下限は今後の検討を期すが，操業年代の一端として，17 世紀第３四半期前後を想定しておきたい。

以上のように，現在までに発掘調査されている単室登窯の年代は，いずれも古い年代が考えられるが，その下限はいつまで下るのであろうか。ここで苗代川の五本松窯について触れておきたい。五本松窯は，『研究』において寛文９年(1669)開窯という年代観が示されて以来(p.181)，それが踏襲されているが，一方，より新しく見る考えもある。関一之氏は，五本松窯跡採集の窯道具を報告するとともに，他の窯跡出土の窯道具と比較し，その形態が19世紀の磁器窯に見られる形態と類似していることを指摘，少なくとも19 世紀前半代までは操業していたとしている（関 2000・2003)。また『研究』において提示されている採集資料の写真を見る限り，瀬戸美濃地方や肥前地方において18世紀後半以後に盛んに生産される土瓶（茶家）が含まれていること，また摺鉢の櫛目や形態が，筆者が19 世紀代を想定した仮称４型式（渡辺 2000a)に類似していることが指摘できる。以上から，五本松窯は従来言われているように17世紀中頃という古い年代とは想定しがたく，18 世紀後半以後，19 世紀代に稼働した窯ではないかと考えられる。

また1914 年の『日本近世窯業史』中には，「明治の初年頃まで，苗代川辺に壺窯式を存在せしは，専ら黒焼の用に供せしものか。但し此窯は其後に絶えて，独り琉球に伝存せり」（大日本窯業協会編 1914　p.1430，下線渡辺）とある。ここでいう「壺窯式」とは，そのあとの文章「独り琉球に伝存せり」から，のちに改めて触れる沖縄で荒焼（無釉焼締陶）を生産した単室登窯を指すものと推定される。

以上，採集資料と後代の文献資料という間接的な資料に基づくものではあるが，苗代川において単室登窯が，17 世紀代だけではなく，19 世紀，明治の初頭まで存在していた可能性は高いものと考える。

(3) 連房式登窯

1) 直壁形連房式登窯

現在確認されている直壁形連房式登窯のもっとも古い事例は山元窯で，その操業年代は寛文７年(1667)～延宝４年(1676)と考えられている（『研究』pp.47-48 など)。これについては異論もあるが（前田 1941 pp.100-102)，出土した資料からも 17 世紀第３四半期頃と想定される。

龍門司古窯の開窯年代は，窯跡後方に所在する荒神宮の建立年代が享保３年(1718)であることから，ほぼ同時期と考えられ（『研究』p.61)，1953 年まで使用されていた。もちろんこの間，何度となく改修が行われていたと考えられ，先述したように，現在は８室の焼成室が残るが，もともとは11室以上あったとされている。それゆえ操業期間通じて同一構造の窯であったと断定することはできないが，本例に先行し，系統的につながる山元窯が直壁形連房式登窯であったことから，本例もまた江戸時代における直壁形連房式登窯であったと推定することはあながち無理ではなかろう。

竪野冷水窯の開窯は，元和６年(1620)と推定されている。これは前年に島津義弘が没し，金海が１年の服喪期間を経て，鹿児島に召されたとする伝承に基づく推測であり（『研究』pp.106-107，294)，同時代史料とは言い難い。ただし冷水窯跡より寛文6年(1666)銘の染付陶片が出土していることから（戸崎他編 1978　p.69)，それ以前の開窯であることは言える。しかし言うまでもなく，検出された窯体は，最初期のものではなく，窯場最終段階のそれである。そこで閉窯年代が問題となるが，冷水窯の閉窯年代については，天保 13 年(1842)に竪野稲荷窯が開窯するとともに閉窯したとする説（野元 1982　p.126 など）と，幕末まで存続したとする説（『研究』p.125，戸崎他編 1978　p.67 など）があり，確定していない。ただし同窯跡から文化年間(1804-18)の紀年銘資料が採集されていることから（『研究』p.124)，19 世紀初頭には確実に操業されていたと考えられる。検出された直壁形連房式登窯はその頃には存在していたと推定できよう。

では竪野冷水窯にいつの時点で連房式登窯が導入されたのか。この点については，従来，寛永 13 年(1636)，金海の息子・金和が肥前へ陶法修行に出たのをきっかけとして導入されたとされている（『研究』p.258 など)。しかしすでに前田幾千代氏が指摘しているように，その修行の際，金和は「錦手」を習得したとされているが，肥前における色絵の出現は1640 年代と考えられており，その記述内容と一致しない（前田 1934(1976)p.372)。それゆえこの記事を根拠として，連房式登窯の導入時期と想定するのは慎重であるべきであろう。

以上より，直壁形連房式登窯は遅くとも 17 世紀第３四半期頃には導入され，龍門司系窯場ではその後も受け継がれて昭和まで連綿と使用されていたと考えられる。竪野系窯場では，導入時期は不明ながら，19 世紀前半代において使用されていたと推測される。

なお山元窯に先行して，寛文３年(1663)開窯とされる元立院窯で連房式登窯が用いられた可能性があるが，1991 年の発掘調査では窯体は確認されておらず，現段階では未確定である（下鶴編 1995)。

2) 扇形連房式登窯

扇形連房式登窯で，その開窯年代が確定できるのは弥勒窯である。本窯跡には開窯の際に建立された「山神」を祀った石塔が残っており，そこには「皿山御免許」という銘文とともに，天明６年(1786)の年号が刻まれている（関編 2001　p.9)。稼働期間については，寛政８年(1796)の天草上田家の『近国焼物山大概書上帳』「薩摩領皿山之分」に出てくる「忠佐皿山」が，この弥勒窯を指していると考えられ

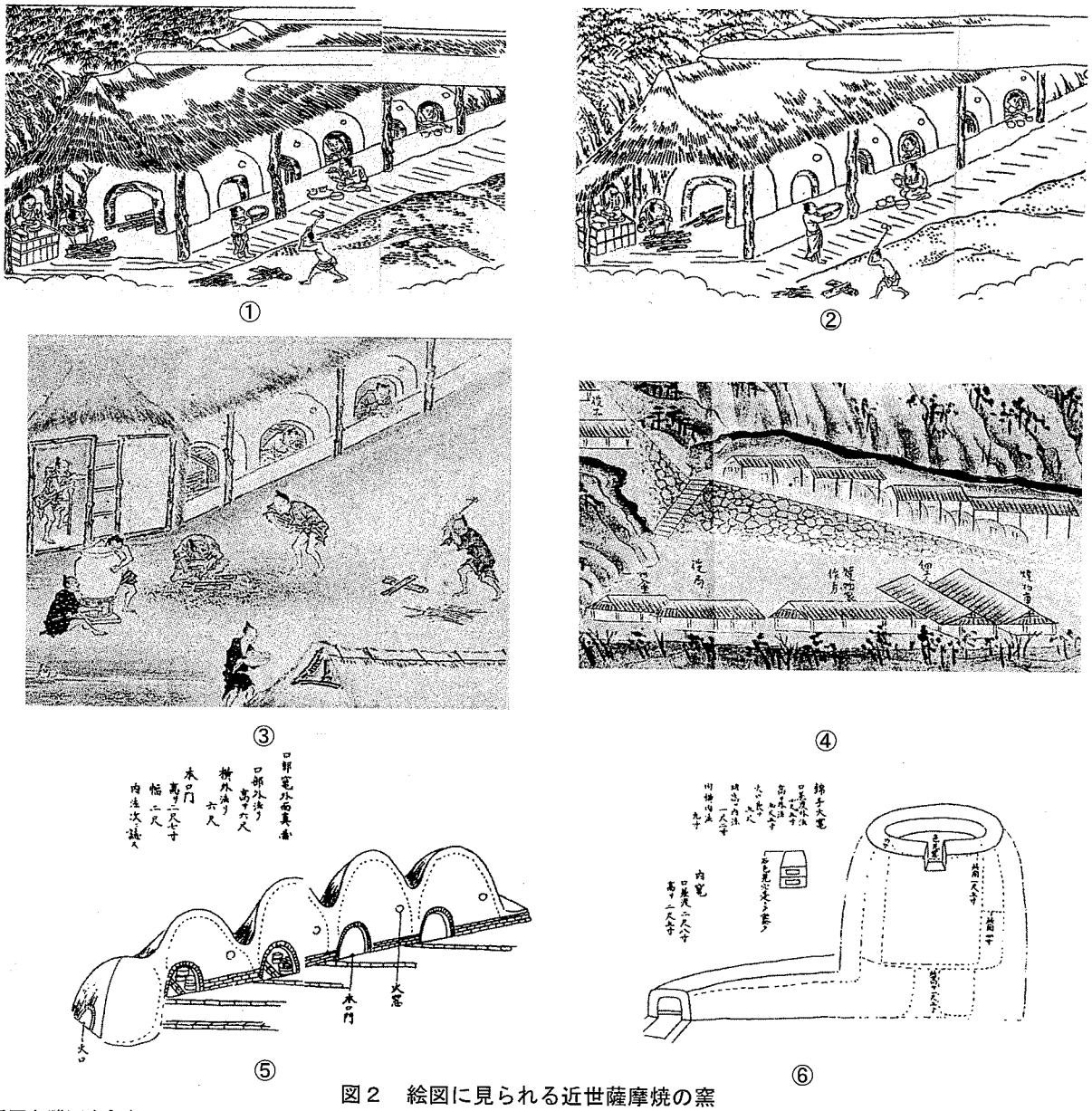

図２　絵図に見られる近世薩摩焼の窯

①『三国名勝図会』（原口監修 1982 より），②『薩藩名勝志』（鹿児島大学附属図書館・玉里文庫所蔵）
③『薩藩勝景百図』（東京大学史料編纂所所蔵，鹿児島大学附属図書館提供），④『薩州鹿児島見取絵図』（佐賀県武雄市教育委員会所蔵，鹿児島大学附属図書館提供），⑤『高麗傳　薩摩焼陶器製造圖』（口部竈）（『陶器全集』第3巻より），⑥『高麗傳　薩摩焼陶器製造圖』（錦手大竈）（⑤と同）

ることから，少なくともこの時期までは存続していたと推測される。正確な閉窯年は明らかでないが，製品からは18 世紀第４四半期頃と考えられる（関編2001　p.51，pp.56-59)。

一方，平佐焼窯跡群で最初に開かれたとされている北郷窯の開窯年代は，天明6年(1786)が通説であったが(『研究』pp.204-207)，近年の調査研究により，安永年間(1772-81)まで開窯がさかのぼる可能性が改めて指摘されている(小島1999・2000)。大窯の操業年代は，いくつかの意見があり明確ではないが，その開窯が 18 世紀末にさかのぼる可能性を残しつつも(渡辺2001b)，19 世紀前半から幕末がその操業の中心的年代であろう。新窯は，染付端反碗などが出土していることから，19 世紀中頃，幕末までと推定されている(前・小原2000)。

脇本窯は，従来，平佐焼開窯に先行して，安永5年(1776)開窯とするのが一般的であったが(野元1982　p.131 など)，先述したように，平佐焼の開窯がさかのぼる可能性があるので，再検討を要する。おおまか 18 世紀後半代のいずれかの時期におさまるものと想像される。

なお扇形か直壁形か現状では判断できないが，磁器を焼いた苗代川の南京皿山窯は，残存している陶塔より，弘化3年(1846)開窯であることが知れる(『研究』pp.215-218)。

以上より扇形連房式登窯の出現時期は 18 世紀後半ないしは第4四半期頃と想定され，少なくとも幕末までは用いられていたと考えられる。

5　絵図に見られる連房式登窯

本章では各種絵図に見られる連房式登窯について整理しておきたい。

苗代川の窯場風景を掲載する絵図として，『三国名勝図会』(天保14年(1843))がもっとも有名であるが，それに先行する資料として『薩藩名勝志』(文化3年(1806))，『薩藩勝景百図』(文化12年(1815))がある。『三国名勝図会』に掲載されている「苗代川瓷器製造之図」(図2－①)は，『薩藩名勝志』のそれ(図2－②)を踏襲したもので，細部に違いはあるものの，素材・構図ともに共通する。『薩藩勝景百図』は彩色されており(図2－③)，全体の構図は『薩藩名勝志』に似ているが，部分的に省略されており，また人物の異同が見られる。

これらにはいずれも連房式登窯の図が描かれているが，焚き口や窯体後半部などが省略されているため，正確な室数および直壁形・扇形の区別は不明である。ただし窯から茶家(土瓶)を取り出している場面が描かれていることから，連房式登窯で陶器を焼成したと推測することは可能であろう[5]。また少なくとも『薩藩名勝志』の成立年代，文化3年(1806)には，苗代川において連房式登窯が用いられていたことは確実である[6]。

苗代川の連房式登窯の絵図は，『高麗傳　薩摩焼陶器製造図』にも収録されている(図2－⑤)。「口部竈」というキャプションの付いたこの図は，明治5年(1872)，翌年のオーストリア・ウィーン万国博覧会の準備資料として，明治政府に提出された文書と考えられている(深港2000)。やはり直壁形か扇形かは判別できず，また窯の描き方にやや不自然な観が否めないが，明治初頭の苗代川に連房式登窯が存在したことを示している。

もうひとつ連房式登窯を描いた絵図として，安政4年(1857)に薩摩を訪れた佐賀藩士が描いた『薩州鹿児島見取絵図』がある。この絵図は，当時，島津斉彬が押し進めていた集成館事業に関わる諸施設が描かれている点で，きわめて貴重な資料であるが，その中に事業の一環として開かれた磯窯が描写されている(図2－④)。絵図によれば磯窯は10ないしは11室の連房式登窯と見られ，室数で見る限り，同時期の平佐焼大窯に匹敵する規模である。それゆえ「磯御庭窯」という別名から想像されるような趣味的なものではなく，きわめて産業志向の強い窯であったことがうかがわれる。『江夏十郎関係文書』によれば竪野窯の星山仲次が，反射炉用の耐火煉瓦を焼くよう命じられており(芳1992　p.289)，また苗代川の朴正官も釉薬の開発などに従事したと伝えられている(「繭糸織物陶漆器共進会　陶器功労者履歴」)。また磁器焼成も試みており(『研究』pp.138-143)，この窯が直壁形か扇形かは興味深いところであるが，現段階では判定できない[7]。

6　近世薩摩焼における窯構造の特徴

これまでの検討結果をまとめると，図3になる。本章では，この図に基づきながら，近世薩摩焼における窯構造の特徴を整理・検討するとともに，派生する若干の問題について言及したい。

まず宇都窯Ⅰ期については，現段階ではその全体形・系譜など不明な点が多いが，薩摩焼草創期の焼成技術の様相を考える上できわめて貴重な資料であることは間違いない。今後のさらなる検討を期したい。

単室登窯も同様に，16世紀末，薩摩焼草創期の串木野窯において採用されている窯構造であり，朝鮮陶工たちの苗代川移住後も，堂平窯に見られるように引き続き築造・使用され，おそらく明治初頭まで存続していたと予想される。ただしこの予想については，今後の考古学的検討を必要とすることは言うまでもない。

直壁形連房式登窯は，山元窯跡の事例から，遅くとも17世紀第3四半期までには導入され，その後，陶器焼成窯として，竪野冷水窯，龍門司古窯など，江戸時代を通じて採用されていたと考えられる。

それに対して扇形連房式登窯は，18世紀後半，新たに磁器を焼成する窯として導入され，脇本窯・平佐窯・弥勒窯などで採用される。弥勒窯の山神石塔に見られるように，陶器窯の陶工が磁器焼成へ参画したが[8]，扇形連房式登窯である磁器窯導入後も陶器窯は従来の直壁形連房式登窯を用い続けていた。つまり両者は，その製品の違いから異なる窯構造として使用されていたと考えられる。

このことと関係する興味深い文献がある。吉田光邦・横田清氏が紹介している『御内用方萬留一番』の弘化3年(1846)3月20日付文書によれば，苗代川の磁器窯・南京皿山窯構築にあたっては，平佐焼の「平佐家来北郷次兵衛拘者　仲蔵」という「竈打ち調え方に取馴れ居り候者」が派遣されていたという(吉田・横井1965　pp.106-107)。先述した各種絵図から，この時期すでに苗代川に連房式登窯があったことは確実であるが，磁器窯構築にあたって，平佐焼の「仲蔵」を呼んだことは，陶器用連房式登窯の構築技術と磁器用のそれとが，異なる技術であった可能性を暗示している。

ところで単室登窯と直壁形連房式登窯とはともに主として陶器を焼成した窯構造であるが，両者の違いは何に由来するのであろうか。

竪野冷水窯の製品は，藩窯という性格から，茶入や茶碗など茶道具が多く，とくに白薩摩が窯跡から大量に出土している。一方，山元窯や龍門司古窯の主要製品は，碗や皿など，日用の小型食膳具である。龍門司の場合，原料となる粘土が大型品の製作に適していなかったとされている[9]。つまり直壁形連房式登窯では小型品の生産が顕著である。それに対して苗代川は，甕・壺・摺鉢といった日用大型品の生産

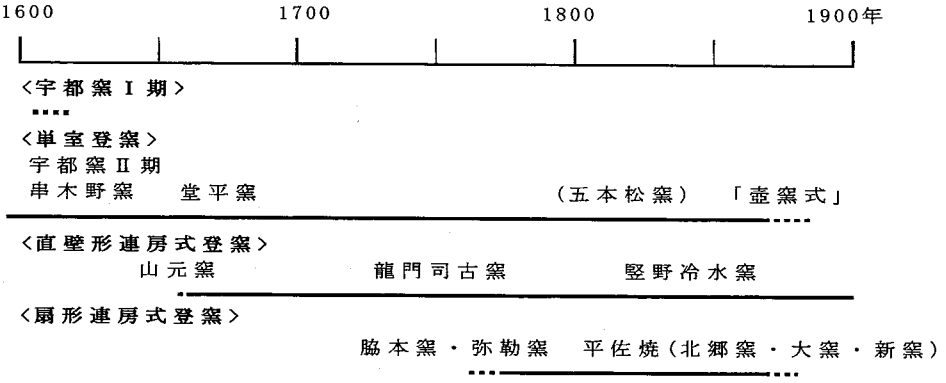

図３　近世薩摩焼における窯構造の変化

地として知られ，堂平窯跡からも大量の甕・壺類が出土している。同じ陶器でも，連房式登窯では小型品を，単室登窯では大型品を主として生産していると考えられる。ただし島津義弘の保護の下，茶道具を中心に焼成した宇都窯Ⅱ期は単室登窯ではあるが，やや性格が異なると言えよう。

この窯構造の使い分けを示唆する以下のような類似例が，大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）によって指摘されている[10]。

近世の琉球（沖縄）には，大壺や水甕などを中心とした荒焼（無釉焼締陶器）と，食膳具を主体とした上焼（施釉陶器）の二者があるが，前者は単室登窯，後者は連房式登窯でそれぞれ焼成された（図4）。琉球は，慶長14年(1609)以後，実質的に薩摩藩の支配を受けており，密接な関係にある。陶磁器技術においても，苗代川系の朝鮮陶工のうち「安・張二姓」が陶法指南のために琉球に派遣されたと『留帳』は伝えており（深港2000参照），一方，琉球側では「張姓家譜」に，萬暦44年(1616，元和2年)鹿児島より「一六」という「高麗国人」の陶工が「一官」「三官」とともに渡ってきたと伝えられている（比嘉1936a pp.29-30)。また雍正8年(1730，享保15年)には，琉球の陶工・中村渠致元（用啓基）が薩摩を訪れ，竪野や苗代川を見学している（「用姓家譜」より　比嘉1936b　pp.29-30)。また池田榮史氏(1995）は，両窯構造の源流を鹿児島に求めており，鹿児島と琉球とが似たような焼成技術・体制を取っていた可能性は十分に考えられよう。

ただし，これら竪野冷水窯・山元窯・龍門司古窯・苗代川堂平窯における主要製品の内容の違いは，窯場そのものの性格に由来するという面もあり，ただちに窯構造の差異に結びつけることはできない。むしろ注目されるのが，連房式登窯と単室登窯が共存していたと想定される苗代川における状況である。この点については，すでに『研究』において，「苗代川窯は其後肥前陶法の影響をうけて窯の構造様式も肥前系のものと改められたが，黒物手の日用雑器専焼の窯場は依然として朝鮮系半円筒形単室傾斜窯が使用されていたのである。」(p.258)と指摘されている。ただし，今のところ苗代川では，連房式登窯の発掘調査事例がないため，前掲の絵図で茶家を焼いていたことは想定できるものの，考古学的に検証していく必要がある。なお苗代川における窯構造の使い分けについては，それを示唆する文献が残されており，次章で検討したい。

以上まとめるならば，近世鹿児島において陶磁器焼成用の窯の構造は，評価が未確定の宇都窯Ⅰ期を除くと，単室登窯→直壁形連房式登窯→扇形連房式登窯という順番で導入されたが，新しい窯構造の導入によって古い窯構造が駆逐されることはなく，おそらく焼成製品により使い分けられながら，いずれの窯構造も幕末まで継続して用いられていたと考えられる。

7　文献に見られる窯の種類－苗代川の場合－

最後に，前章で指摘した単室登窯と直壁形連房式登窯との使い分けと関連して，その具体相を知る手がかりとなる文献について検討したい。

『苗代川　所役日記』には，弘化2年(1845)10月21日付の次のような文書がある（谷川他編1979　pp.725-726)。

「右は細工人主取卞周宗・朴金鐵・車碩益，細工人姜玄丹・何早吟，当座へ罷出賦書いたし，甫阿弥方へ差出し候，書付の留」

これは苗代川における新窯開窯にあたって，藩の資金援助を得るために作成された「口部竈」と「売買焼物竈」の2種類の窯の見積書（賦書）である。焼成にかかる薪代や粘土代，手間賃などとともに，その総額，売り払い額，両者の差引額＝純利益が試算されている。このほか「口部竈」を構築するための費用の試算も別に行われており，文書の前後の脈絡より，最終的には「口部竈」が開窯したと考えられる[11]。なお文中に出てくる「甫阿弥」とは，村田甫阿弥（堂元）のことで，彼は，19世紀前半，藩財政再建に奔走した藩家老・調所広郷の命を受け，苗代川振興に尽力した人物である。

この文書の記載を整理したものが表3である。まずそれぞれの(9)純利益を見ると，両者に大きな違いがあることがわかる。いま，「(9)純利益／(8)売り払い額」を「利潤率」とした場合（表3最下段），口部竈の利潤率(0.45)は，

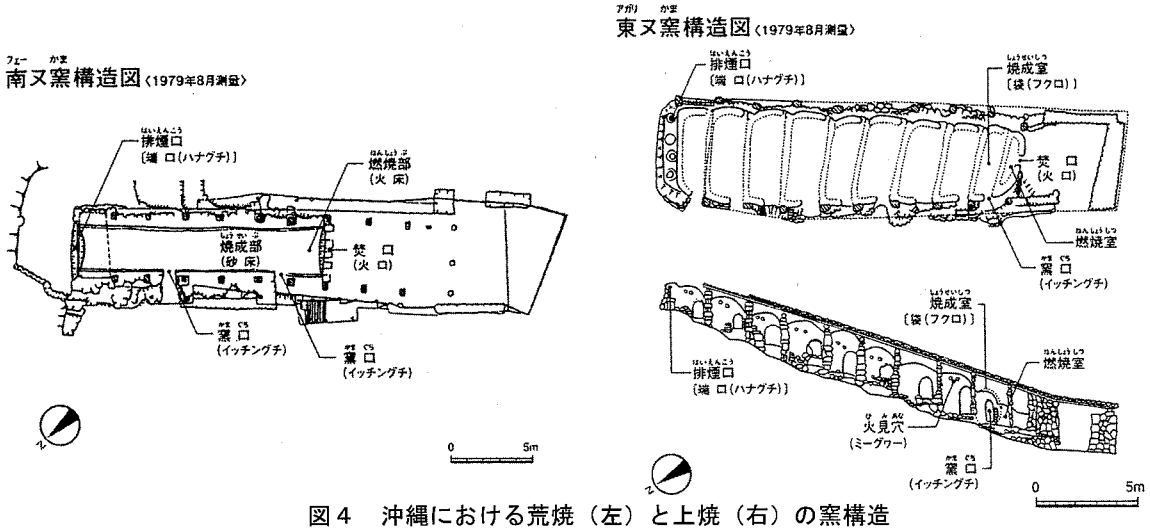

図４　沖縄における荒焼（左）と上焼（右）の窯構造

（那覇市立壺屋焼物博物館編 1998 より）

表３　『苗代川　所役日記』に見られる「口部竈」と「売買焼物窯」との比較

No	項目	口部竈(壹軒　口部数八つ)	売買焼物竈(壹軒)	口部：売買
1	口木 間戸木 合薪 薪壹駄 代分	拾六駄(16駄　「拾八駄」？) 拾六駄(16駄　「拾八駄」？) 三拾六駄(36駄) 貳百文(200文) 七貫貳百文(７貫200文)	拾八駄(18駄) 拾八駄(18駄) 三拾六駄(36駄) 貳百文(200文) 七貫貳百文(７貫200文)	1：1
2	地土 壹駄代分	貳拾壹駄(21駄) 八拾文(80文) 壹〆七百四拾文(〆＝貫) (１貫740文)	五拾九駄(59駄) 八拾文(80文) 四貫九百拾六文 (４貫916文)	1：2.8
3	糎方并合調 手間賃金	六日分 壹〆五百文(１貫500文) (１日250文)	拾七日分 四貫貳百四拾八文(４貫248文) (１日約250文)	1：2.8
4	薬土灰代分	五百文(500文)	壹〆六百文(１貫600文)	1：3.2
5	荒作り賃分	(茶家数)貳千八百位(2800) 五貫四百文(５貫400文)	八貫四百文(８貫400文)	1：1.55
6	仕揚方并蓋 作成就手間 賃分	四拾八日分(48日分) 拾貳貫文(12貫文) (１日250文)	四拾八日分(48日分) 拾貳〆文(12貫文) (１日250文)	1：1
7	惣合入具 (総費用)	弐拾八貫三百四拾八文 (28貫348文)	三拾八貫三百六拾四文 (38貫364文)	1：1.35
8	焼調売払 (売り払い額)	五拾貳貫文位 (52貫)	四拾八貫文位 (48貫)	1：0.92
9	差引 (純利益)	貳拾三貫六百四拾八文位得分 (23貫648文)	九貫六百卅貳文位得分 (9貫632文)	1：0.41
利潤率（純利益／売り払い額）		0.45	0.20	2.25：1

売買焼物竈のそれ(0.20)の２倍以上の値を示す。この利潤の違いは，すでに深港恭子氏によって指摘されているが(深港2002　p.34)，本稿では，前章までの考古学的成果を加味しながら，もう少し詳しく検討してみたい。

さて本文書に掲げられている(1)薪代に着目すると，両窯において違いはなく，両窯は同一規模の窯と想定されていると考えられる。ところが(2)地土使用量，(3)手間賃金，(4)薬土灰代金においては，売買焼物竈は口部竈の３倍前後の量・賃金を必要としており，(5)荒作り賃分においても1.5倍である。

つまり売買焼物竈は，口部竈の３倍前後の原料・賃金を使いながら，利潤率は１／２以下であり，このことは両窯の製品の内容の違いを示唆している。口部竈の製品については，「荒作り賃分」の項に「茶家」が出てくることが手がかりとなる。茶家，つまり土瓶は，江戸時代後期の苗代川における主要生産物のひとつと考えられ，19世紀頃，上方において薩摩の土瓶が流通していたことが，『西遊記』(橘(宗政校注)1974　pp.172-173)や『薩陽往返記事』(谷川他編1969　p.617)などの記述から知られる。また文政11年(1828)改編の『薩藩政要録』によれば「他国出御利潤有之品々之事」，つ

まり他藩に出荷して利益を得る品々のひとつとして「茶家」が挙げられている(鹿児島県史料刊行会編1960　pp.183-184)[12]。以上より口部竈の製品として挙げられている「茶家」は，当時の苗代川・薩摩藩にとって商品価値の高いものであったと推測される(橋口2001 p.14)。『三国名勝図会』などの描写は，このような状況の反映であろう。

それに対して売買焼物竈の項には具体的な製品名は挙げられていない。もちろん単に省略されているだけの可能性も残るが，先述したような地土・薬土灰の使用量・代金が3倍近いことから，売買焼物竈では，甕や壺，摺鉢といった大型品を主として生産していた可能性が想定できよう。そして利潤率の違いから，売買焼物竈の製品は，茶家のように商品価値が高いものというより，安価な日用品であったと推測される。

では両者の窯構造には違いがあったのであろうか。口部竈は，前掲の『高麗傳　薩摩焼陶器製造図』の図面(図2－⑤)と，文書に「壹軒　口部数八つ」とあることから，8室(1室を胴木間とすると7室)の連房式登窯と考えられる。それに対して売買焼物竈は単に「壱軒」とのみあり，「口部数」の記述はない。これもまた単なる省略という可能性は排除できないものの，前章までの検討を総合すれば，売買焼物竈が単室登窯であったと想定することもけっして無理なことではなかろう。

以上，本文献に記された2種類の窯のうち，「口部竈」が連房式登窯であることはほぼ間違いないとしても，「売買焼物竈」が単室登窯を指しているかどうかは，確定できない。しかし19世紀中頃の苗代川において，製品内容に由来すると考えられる2種類の窯があったことは，少なくとも前章で想定した単室登窯と連房式登窯の使い分けとけっして矛盾するものではないといえよう[13]。

おわりに

本稿の結論は，以下のようにまとめられる。

(1) 近世薩摩焼の窯構造は，宇都窯Ⅰ期・単室登窯・連房式登窯に分類でき，連房式登窯は平面形態より直壁形連房式登窯と扇形連房式登窯に細分できる。

(2) 各窯構造の存続年代は，図3のように整理できる。新しい窯構造が導入されても，古い窯構造は駆逐されず，共存する。

(3) 窯構造の違いは，焼成する主要製品の内容と結びついており，単室登窯と直壁形連房式登窯は陶器を，扇形連房式登窯は磁器を焼成した。

(4) 単室登窯と直壁形連房式登窯は，ともに陶器を焼成したが，前者（宇都窯Ⅱ期を除く）では大型品を，後者では小型品を主体としていた可能性が，沖縄における類似例ならびに同時代の文献資料から推測される。

最後に今後の課題を整理して，結語としたい。

まず繰り返しになるが，薩摩焼草創期の生産様相を理解する上で，宇都窯Ⅰ期の評価は重要であろう。ついで本稿で示した単室登窯の下限は，今のところ採集資料や後代の文献による間接的資料に基づく予想であり，考古学的に確定する作業を必要とする。同様に単室登窯と直壁形連房式登窯の製品の違いも考古学的に検証していく必要がある。また今回の検討は主として連房式登窯の平面形態による分類・検討であったが，他の属性を含め，さらに窯道具も含めた焼成技術全体の復元が求められる。そして最後に他地域，とくに肥前地方の影響をうけながらも独自の陶磁器を生産していた九州各地の窯構造の変遷と比較することで，近世薩摩焼の焼成技術の特質を明らかにしていくことができよう。

また今回は扱わなかったが，薩摩焼における上絵付け窯など小型窯の検討も必要である。竪野系窯場や19世紀後半以後の苗代川では，色絵陶器が生産されており，それらは幕末明治における金襴手薩摩へと発展していく。上絵付け窯は，近年，考古学的にも注目されつつあり（佐々木2002など），その成果は薩摩焼研究にとっても大きな示唆を与えてくれる。しかし現在のところ，薩摩焼の上絵付け窯に関する資料は，本文中でも触れた『高麗傳　薩摩焼陶器製造図』に掲げられた大・中・小3種類の「錦手竈」の図程度にとどまり（図2－⑥），実態ははっきりしない(渡辺2003)。今後の検討を要すべき課題といえよう。

2004年3月30日　稿了

謝辞

本稿は2002年12月9日に開かれた，鹿児島大学総合研究博物館・第2回研究交流会において報告した内容を骨子としています。報告の機会を作っていただいた同博物館の大木公彦・橋本達也両先生に感謝申し上げます。また交流会席上，出席いただいた方々からご教示いただき，成稿にあたってもさまざまな方からご指導，ご助言をいただきました。文末にご芳名を記して，深甚の謝意を表します。

池田榮史・池畑耕一・大武進・大橋康二・鹿児島大学附属図書館・鹿児島陶磁器研究会・小島早智子・佐々木達夫・下鶴弘・新里貴之・鈴木裕子・関明恵・関一之・高津孝・武雄市教育委員会・田村省三・沈壽官(15代)・出口浩・寺尾美保・東京大学史料編纂所・中島哲郎・中村直子・新田栄治・橋口亘・深野信之・深港恭子・本田道輝・松尾千歳・松村真希子・山下廣幸(五十音順・敬称略)

注

(1) このほか発掘調査されているが，窯体未確認の窯跡資料として，加治木町御里窯(関編2003)・日木山窯(2001年発掘調査)，姶良町元立院窯(下鶴編1995)・小松窯(2001年発掘調査)・重富皿山窯(深野2002)，東市来町雪山遺跡(宮田・関・三垣編2003)などがある。なお姶良町の宇都窯跡・小松窯跡・重富皿山窯跡発掘調査の成果については，2004年3月に，姶良町教育委員会により正式報告書が刊行される。

(2) 筆者はこれまで薩摩焼の窯構造について，「単室傾斜窯」「階段状連房式登窯」などの名称を用いたこともあったが(渡辺2001aなど)，ここで本文中の表記に統一する。ただし「宇都窯Ⅰ期」については，本文中でも述べているように，暫定的なものである。

(3) 脇本窯跡は，第1焼成室の中央部に火床を作り，その上下（南北）にそれぞれ「砂床A」と「砂床B」があると報告されている(池水1978)。このような構造が本来的なものなのか，途中で改修された結果なのかは，報告からは判断できない。今後の検討課題としたい。

(4) なお連房式登窯における直壁形＝陶器，扇形＝磁器という違い

は，関一之氏（加治木町教育委員会）のご指摘による。
(5)今回は提示しなかったが，このほか『三国名勝図会』などには，作業場の図もあり（原口監修1982　第1巻　pp.490-491)，大甕や鉢，茶家などの陶器を製作している場面が描かれている。
(6)『三国名勝図会』については原口監修1982第1巻pp.488-489を，『薩藩名勝志』については鹿児島大学附属図書館蔵・玉里文庫本を，『薩藩勝景百図』は東京大学史料編纂所所蔵のもので，鹿児島大学附属図書館が所蔵している写真を参照した。
(7)『薩州鹿児島見取絵図』は，佐賀県武雄市教育委員会所蔵である。本稿では鹿児島大学附属図書館所蔵の写真を参照した。
(8) 山神石塔の銘文によれば，肥前平戸の細工人・絵師とともに，龍門司窯の川原十左衛門（芳工）とその嫡子川原弥五郎が弥勒窯に参画している(関編2001　p.9)。
(9) 関一之氏（加治木町教育委員会）のご教示による。
(10) この指摘は，1999年の第9回九州近世陶磁学会の席上において示されたものである。
(11) なおこの「口部竈」は，ウチコク窯と呼ばれている窯に当たると深港恭子氏は想定している(深港2002　p.34-35)。
(12)なお同書には，「他国江不出品々之事」として「茶湯道具」が，また「御勝手方証文を以他国出品々之事」として「焼物壺」が挙げられている。同じ薩摩焼であっても，製品内容によってその流通形態が異なっていたことがうかがい知れる(鹿児島県史料刊行会編1960　p.183)。
(13)ただし本文書の記載はあくまで「試算」であり，また文書の目的が藩からの資金導入を目的としていることから，口部竈の利潤率を多少潤色している可能性も残る点を注意しておかねばならない。

参考引用文献

「高麗傳　薩摩焼陶器製造図」1872年(思文閣復刻1976『陶器全集』第3巻　東京)
「繭糸織物陶漆器共進会　陶器功労者履歴」1885年『薩陶製蒐録』(鹿児島県立図書館蔵)所収
姶良町教育委員会2002「古帖佐焼宇都窯跡発掘調査の概要」『鹿児島県文化財調査報告書』第48集　pp.34-37　鹿児島県教育委員会　鹿児島
池畑耕一1999「鹿児島県堂平窯について」『第9回九州近世陶磁学会資料』pp.90-91　九州近世陶磁学会　有田
池水寛治1978「阿久根市脇本窯址」『紀要出水』pp.8-18　鹿児島県立出水高等学校　出水
池田榮史1995「琉球近世窯業史考」『琉大アジア研究』創刊号　pp.43-57
鹿児島県維新史料編さん所1983『旧記雑録後編　三』鹿児島県　鹿児島
鹿児島県史料刊行会編1960『薩藩政要録』鹿児島県史料集(1)　鹿児島県立図書館　鹿児島
鹿児島県歴史資料センター黎明館編1998『世界のさつま』展図録　同館　鹿児島
芳即正1992「江夏十郎関係文書(一)」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』22　pp.1-30
小島早智子1999「平佐焼染付寄進文香炉と平佐焼染付寄進文両耳花瓶」『からから』No. 3
小島早智子2000「平佐焼の展開」川内市歴史資料館編2000　pp.38-41
佐々木達夫2002「江戸時代の小型窯の系譜を探る」『金沢大学考古学紀要』第26号　pp.107-116
下鶴弘編1995『元立院窯跡』姶良町教育委員会　姶良
前幸男・小原浩2000「平佐新窯－天辰地区埋蔵文化財発掘調査事業(皿山第一地区)概要－」川内市歴史資料館編2000　pp.53-59
関一之2000「五本松窯跡採集資料」『からから』No.6
関一之2003「「切高台付ハマ」と呼ばれる窯道具について」『からから』No.15　pp.5-14
関一之編1995『山元古窯跡』加治木町教育委員　加治木
関一之編2001『弥勒窯跡』加治木町教育委員会　加治木
関一之編2003『御里窯跡』加治木町教育委員会　加治木
川内市歴史資料館編2000『用と美－平佐焼の世界』展図録　同館　川内
大日本窯業協会編1914『日本近世窯業史』(柏書房復刻1991『日本窯業史総説』5巻　東京)
田沢金吾・小山富士夫1941『薩摩焼の研究』座右宝刊行会(国書刊行会復刻1987年　東京)
橘南谿(宗政五十緒校注)1974『東西遊記2』東洋文庫249　平凡社　東京
谷川健一他編1969『日本庶民生活史料集成』第2巻三一書房東京
谷川健一他編1979『日本庶民生活史料集成』第10巻三一書房東京
寺尾作次郎1967「龍門司焼古窯」『鹿児島県文化財調査報告書』第14集　pp.51-62　鹿児島県教育委員会　鹿児島
戸崎勝洋他編1978『竪野(冷水)窯址』社団法人鹿児島共済南風病院　鹿児島
永島福太郎校注1984『宗湛茶湯日記』西日本文化協会　福岡
那覇市立壺屋焼物博物館編1998『壺屋焼物博物館常設展ガイドブック』同館　那覇
野元堅一郎1982「薩摩」『日本やきもの集成12』pp.123-131平凡社　東京
橋口亘2001「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼－近世薩摩焼の南と北－」『からから』No.10　pp.9-16
原口虎雄監修1982『三国名勝図会』全五巻　青潮社　熊本
比嘉朝健1936a「琉球歴代陶工家譜(上)」『美術研究』49　pp.29-36
比嘉朝健1936b「琉球歴代陶工家譜(下)」『美術研究』52　pp.28-34
深野信之2002「重富皿山探索記」『からから』No.12　pp.11-14
深港恭子2000「薩摩焼をめぐる苗代川関係文書について」『黎明館調査研究報告』第13集　pp.101-133
深港恭子2002「弘化から嘉永年間の苗代川における焼物生産について」『黎明館調査研究報告』第15集　pp.27-41
前田幾千代1934『薩摩焼総鑑』(思文閣復刻1976『陶器全集』第3巻　東京)
前田幾千代1941「薩摩焼異聞(終)」『茶わん』131　pp.97-107
松村真希子2001a「古薩摩焼茶入研究ノート(一)」『陶説』581　pp.20-28
松村真希子2001b「古薩摩焼茶入研究ノート(二)」『陶説』584　pp.23-37
宮田洋一・関明恵・三垣恵一編2003『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　国分
吉田光邦・横井清1965「秘められた焼もの職人史5」『日本美術工芸』327　pp.104-107
四元幸夫編著1988『東市来町郷土誌』東市来町教育委員会　東市来
渡辺芳郎2000a「近世薩摩焼摺鉢考」『鹿児島考古』34　pp.153-169
渡辺芳郎2000b「川内市平佐焼窯跡群について－1999年の分布・測量調査の成果を中心に－」川内市歴史資料館編2000　pp.44-52
渡辺芳郎2001a「考古学から見た近世薩摩焼」『鹿児島学のプロフィール2』pp.43-48　鹿児島大学　鹿児島
渡辺芳郎2001b「平佐焼大窯の開窯年代をめぐる問題－『近国焼物山大概書上帳』から－」『からから』No.9　pp.15-18
渡辺芳郎2003「薩摩焼の上絵窯（錦窯）に関するノート」『からから』No.15　pp.19-24
渡辺芳郎2004「平佐焼大窯窯跡発掘調査について（速報）」『からから』No.17　pp.2-6

追記

筆者は，1981年10月から1984年3月まで，金沢大学文学部考古学研究室で学びましたが，在学中に研究室が10周年を迎えました。それから早20年の月日が流れたことに深い感慨を覚えます。これも考古学研究室をご指導された歴代の先生方のご尽力の賜物と存じます。思い出話をひとつ。学生時代，大学生協の食堂で佐々木達夫先生とたまたまご一緒になったことがありましたが，その折りに「考古学で過去の精神文化を復元するにはどうしたらいいでしょうか？」と，今思うと赤面ものの質問をしたことがあります。そのときに佐々木先生から，「その設問は間違っている。精神文化を復元したいのだったら，それに必要な資料を，考古学に限らず何でも集め，利用しなければいけない」という主旨のご返事をいただきました。おそらく佐々木先生はご放念されておられるでしょうが，私にとってはとても意味深長な言葉で，その後の研究生活においても，つねに頭に残っていました。その言葉が活かされているかどうかは，いささか心もとありませんが，考古学研究室開設30周年記念の論集に拙文を寄稿できたのも，佐々木先生をはじめとする各先生方のご指導があったからこそと，ここに衷心より御礼申し上げます。また金沢大学考古学研究室のより一層のご発展をお祈りいたします。